

米国史から 日本が学ぶべきもの

テンミニッツTV



神藏 孝之

TAKAYUKI KAMIKURA

イマジニア株式会社取締役会長/ファウンダー/
松下政経塾副塾長/テンミニッツ TV 論説主幹

アメリカは通史でみないとわからない!?

世界史の表舞台に突如として現れたアメリカ。「ペリー来航」によって、日米は初めて接点を持つことになるが、その後アメリカは突如として日本史の中から姿を消す。その間アメリカでは一体何が起きていたのか——。アメリカをより深く理解するためには、独立戦争、南北戦争、第一次世界大戦、世界恐慌、第二次世界大戦などのイベントの「繋ぎ目」を見ることが極めて重要である。

- (1) 『アメリカ社会の複雑性』
～アメリカの全体像をつかむ上で理解すべき「いくつもの顔」～
- (2) 『アメリカの起源と南北戦争』
～南北戦争は奴隷解放のためではなく利害の対立～
- (3) 『産業革命と帝国主義の始まり』
～中国を新たな標的としたアメリカ帝国主義時代の始まり～
- (4) 『アメリカの「もう一つの顔」』
～アメリカの「もう一つの顔」はハートランドにある～
- (5) 『人間力と知恵』
～リベラルアーツを武器として、いかに知識を知恵に変えるか～



【はじめに】

アメリカは、「唯一の同盟国だ」と言われていますが、私たちはアメリカのことをしっかりと理解しているのかという問題意識があります。そこで、今回は、アメリカについて歴史、地理、宗教などの観点から改めて考えてみたいと思っています。その上で、今求められる人物像について、私なりの意見を述べさせていただきます。

(1) アメリカ社会の複雑性

アメリカの全体像をつかむ上で理解すべき「いくつもの顔」

●戦前日本の優れた知米家たち

最初になぜ私がアメリカに興味を持ったのか、ということからお話させていただきます。

「唯一の同盟国」といっているわりに、私たちは本当にアメリカのことをちゃんと知っているのでしょうか。アメリカは大国なので、いろいろな種類の顔を持っていますが、今の人たちは戦前と比べて、アメリカの中のキーパーソンと人脈があるのでしょうか。そこが私の中の問題意識でした。

【イントロ①】なぜ、いま米国研究が

戦前に存在した三人の優れた知米家

1話10分で学ぶ教養動画メディア
10TV
テンミニッツTV
confidential

100年前にこの世を去った希代のジェネラリスト・原敬を筆頭に、戦前の日本には、渋沢栄一や高橋是清などの屈指の知米家が存在した

稀代のジェネラリスト

多分野をスペシャリストとして極め、優れた「全体像把握能力」を携えた規格外の傑物だった

| | | | |
|---------|----|-----|-------|
| ジャーナリスト | 官僚 | 実業家 | 政党政治家 |
|---------|----|-----|-------|



原敬
(1856 - 1921)

知米家

- 1908年～1909年に官費でなく、私費（約2億円）で世界周遊
- その中で米国の熱気と底力を実感
- 「20世紀は米国の時代になる」と確信



渋沢栄一
(1840 - 1931)

- 当時最大の親米家
- 1902年に訪米して以来、何度も渡米
- トルーズベルトやタフトなど、米国に幅広い人脈
- 米国の排日移民法の制定に対して、強く嘆いた



高橋是清
(1854 - 1936)

- 1867年に渡米し、オークランドにて奴隷を経験
- 金融業界に幅広い人脈を持つ
- 特に、日露戦争時には、日銀副総裁として公債募集のため渡米英しヤコブ・シフから戦費調達

1

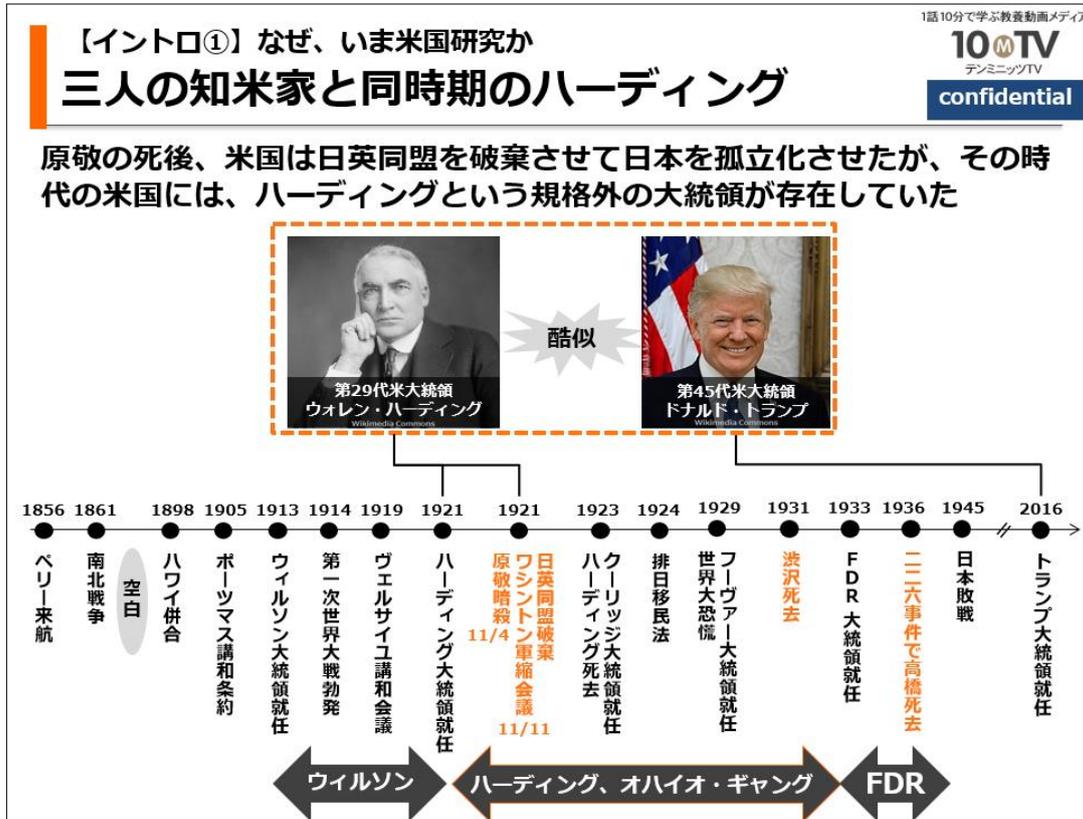
まず、戦前の3人の優れた知米家について紹介します。私は松下政経塾の(塾生の)時に原敬について研究していました。日本が明らかにおかしくなり始めるのは、原敬が1921年に暗殺されてからです。

原敬はどういう人かという、36歳で通商局長、39歳で次官になり、その後、退官して、大阪毎日新聞の社長に就任しました。実業家としては、古河鋳業の実質トップで、北浜銀行の頭取です。政党政治家としては実体上、伊藤博文、西園寺公望に続く三代目の立憲政友会の総裁です。1900年頃から実質的には切り盛りしていきます。そんな彼が1908年から1909年にかけて、官費ではなく私費でアメリカを中心に見に行きます。なぜ彼は、今の金額で2億円もお金を自らかけて、アメリカをつぶさに見たのでしょうか。その結果、「20世紀はアメリカの時代になる」と彼は確信します。これが一人目です。

二人目は、2021年のNHK大河ドラマ『青天を衝け』で主人公になっている渋沢栄一です。渋沢栄一は農民から武士になり、大蔵省の役人になって、そして日本最大の事業家になります。彼がもう一つやったことは日米の友好です。その彼が1924年、排日移民法制定に対して、「こんなことだったら、攘夷の志士をやっておいたほうがよかった」と絶望します。

三人目は高橋是清です。高橋是清は日露戦争の時に日銀副総裁として、ユダヤ人のヤコブ・シフ(あるいはジェイコブ・シフ)率いるリーマン・ブラザーズの前進であるクーン・ローブ商会から金を集めてきました。

●原敬が暗殺された時のアメリカの大統領は誰だったのか



この年表を見てほしいのですが、原敬が暗殺されたのは1921年です。洪沢は、1924年の排日移民法を觀て絶望して、1931年に亡くなります。

アメリカをよく知る金融のユダヤ人ともすごいネットワークがあった高橋是清は、二・二六事件(1936年)で暗殺されてしまいます。

また、1921年11月4日に原敬が亡くなってから、半年以内に(原敬を含め)三人が亡くなります。一人は明治維新のもう一人の重要人物であり、早稲田大学をつくった大隈重信です。もう一人は、元老・山縣有朋です。この1921年あたりから1922年にかけてこれらの人が亡くなり、その後、同盟が破棄され、排日移民法ができ、大恐慌を経て、日本がおかしくなっていきます。

その一番初めの起点に誰がいたのか。原敬が暗殺された時のアメリカ大統領は誰だったのか。調べていくと、ウォレン・ハーディングという人物が出てきました。これが、トランプ前大統領と非常に近い、氏育ちでした。

【イントロ①】なぜ、いま米国研究が トランプとハーディングは酷似

ハーディングは、トランプとの共通点が極めて多く、政権メンバーを「オハイオギャング」といわれる身内で固めていた

二人の共通点

| | ハーディング | トランプ |
|------------|-----------------------------|-----------------------|
| 実業家の 経歴 | 新聞社 | 不動産事業 |
| 選挙前予想 | 泡沫候補 | |
| 選挙手法 | 最新メディアを駆使、ポピュリズムを煽る | |
| | ラジオ | SNS |
| 外交 | グローバル主義否定、自国第一主義 | |
| | 国際連盟へ未加入 | NATO、TPPなどを 否定 |
| 内政 | 保護貿易政策 | |
| | 大規模減税 | |
| 身内主義 | オハイオギャング | クシュナー（娘婿） イヴァンカ（娘） |
| スキャンダル | 女性問題、 ティーボット・ ドーム事件など | ロシア疑惑 女性問題など |

オハイオギャング



引用先：東洋館出版のアンミニッツTV収録「1920年米大統領選挙」

後の大統領を二名輩出

クーリッジ副大統領 → 第30代大統領

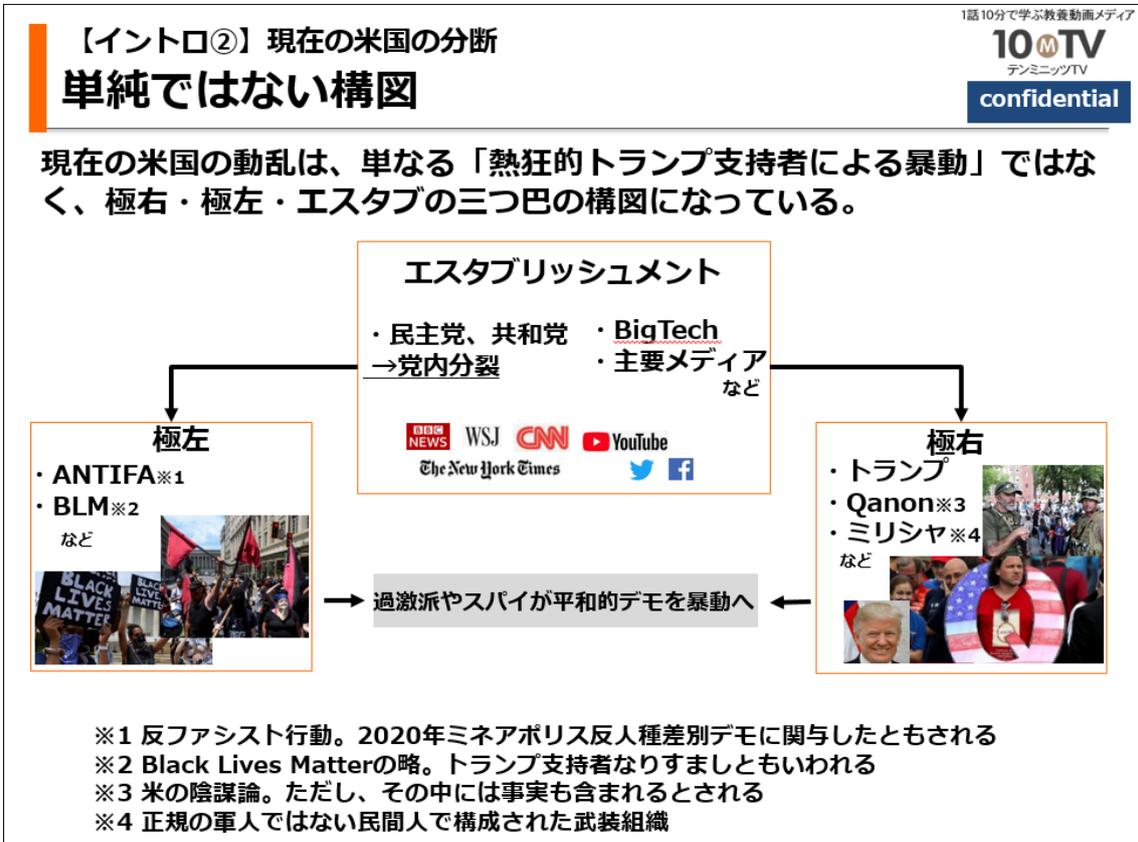
フーヴァー商務長官 → 第31代大統領

「オハイオ・ギャング政権」は、12年間続く

何が似ていたかという点、両者とも当時全くの異種だと見られています。ハーディングは、オハイオの300ドルで買った新聞社を大きくしました。トランプは、ニューヨークの不動産屋です。選挙前予想では泡沫候補でした。選挙手法は、ハーディングの場合は当時の新メディアであるラジオで、トランプの時代はSNSです。両者ともグローバルを全く否定して、徹底的なアメリカファーストの保護主義政策を取ります。内政については、とにかくひたすら減税します。世界中の金をむしろアメリカに戻してきます。

もう一つは、ハーディングの場合ですが、当時の副大統領で次の大統領でもあるカルビン・クーリッジや、大恐慌が起こった時の大統領であるハーバート・フーヴァーなど、オハイオ・ギャングは12年間にわたって続いていきます。あとで詳しく話しますが、スキャンダルが出るまで身内主義になります。

●アメリカはいくつもの顔を持っている

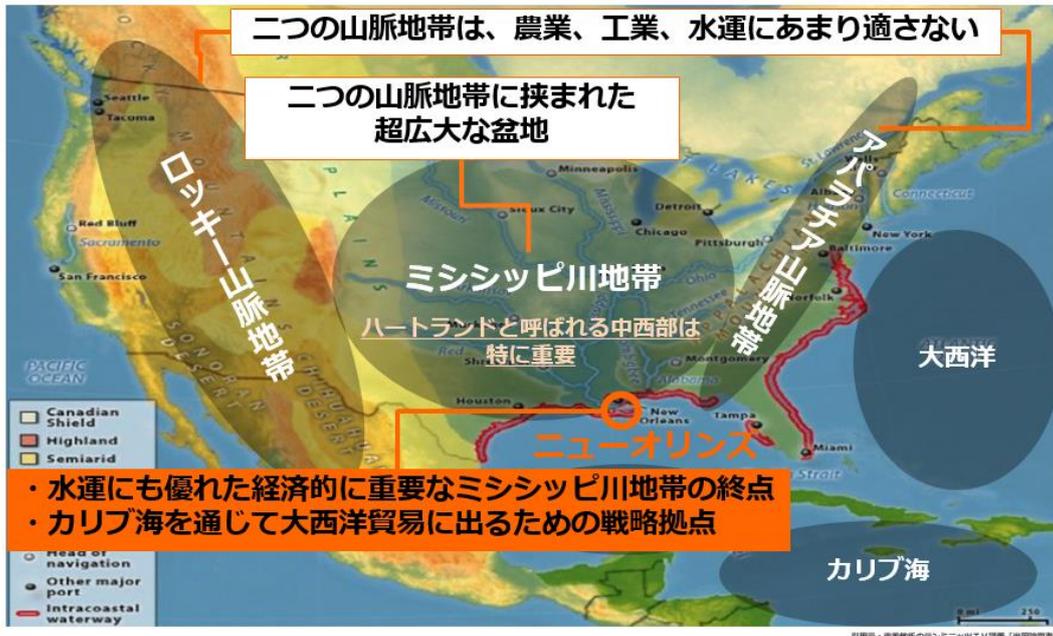


これはアメリカの分断の図です。非常に複雑な形になっているのは、民主党の中にも“ANTIFA”と“Black Lives Matter”を掲げる極左がいます。それから、バーニー・サンダースやエリザベス・ウォーレンといった明らかな社会主義者がいます。さらに、ジョー・バイデンみたいな比較的まともな穏健派がいます。三つの間はまだ完全に分かれています。

一方で、共和党です。共和党の勢力の中でも今はトランプ勢力がもの凄く強くなっていますが、極右としては「Qanon(キューアノン)」がいます。これは500万人ほどいて、陰謀論が大得意です。「Militia(ミリシャ)」は退役軍人の民兵たちで、軍のOBです。共和党も中が三つに分かれています。

民主党も共和党もそれぞれの中が割れているので、「民主党が～」、「共和党が～」という言い方が今はできにくくなってきています。

トランプの支持基盤である内陸部は、日本人に馴染みがある沿岸部とは、性質が異なる。特に、ミシシッピ川地帯は歴史的に重要な意味合いを持つ



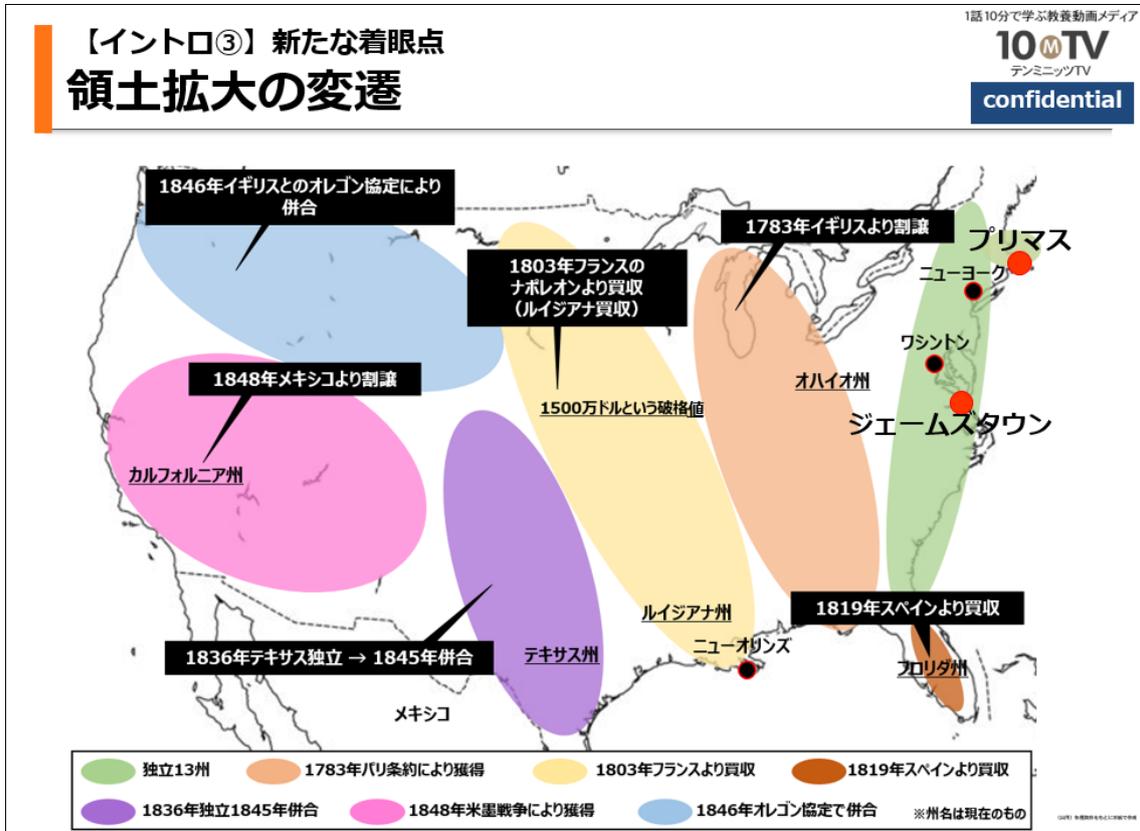
ロッキー山脈とアパラチア山脈の真ん中にあるミシシッピ川流域はハートランドといわれています。ある意味では、ここがアメリカの中心部です。そして、1800年代を通して、ニューオーリンズが最大の貿易拠点です。私たちが知っているアメリカは、東でいくと、ボストン、ニューヨーク、ワシントンのラインです。西はシアトル、サンフランシスコ、ベイエリア、シリコンバレー、ロサンゼルスです。どちらもロッキー山脈の外側とアパラチア山脈の外側ですが、ここだけしか知らないと、アメリカの全体像が見えてきません。

その次の図も見ておいていただきたい。プリマスとジェームズタウンは、イギリスの中の負け組です。一つは冒険的な貴族で、こちらはジェームズタウンに来ました。もう一つは宗教原理主義者で、こちらはプリマスに来ました。

この図で覚えておいていけないといけないことは、アメリカの独立戦争です。1776年に独立して、わずか50年ほどの間に、北米の東のカリフォルニアからオレゴンまで全て取って行きました。ネイティブアメリカンも、フランスもいました。それから、テキサスやカリフォルニアはメキシコから奪ってくるということになります。どうしてこういうことができたのでしょうか。

これはアメリカが持っているもう一つの「アニマルスピリット」というか、荒っぽさを象徴している図だと

思います。



アメリカは日本にとって唯一の同盟国だというのですが、(われわれは)本当にアメリカのことを知っているのでしょうか。アメリカは、数十年単位で全く別の国に変わっていきますし、その変化のスピードがもの凄く速いのです。繰り返し分断したり、統一したり、イノベーションを起こしたりします。

アメリカは大国なので、顔は一つではありません。「アメリカが」という言い方はなく、「もう一つのアメリカ」というように、いくつかの顔を持っているものとして見ていかないと全体像が見えません。トランプが当選した時に「あり得ない」と言っている人がいましたが、ある種トランプが持っている側面(サイド)は、アメリカの原型に近い遺伝子かもしれません。

問題意識

- これからの日本と世界の動向を読むためにも、正しい米国理解は不可欠。
- また、米国は日本にとって唯一無二の同盟国だが、日本人は2016年のトランプ政権誕生から、現在にいたるまで、米国政治に翻弄されている。
- 米国史は「分断」と「統一」の繰り返しであり、100年前にもトランプに酷似したウォレン・ハーディングという人物が大統領選で勝利している。
- そこで、我々にとって馴染みの薄い「米国のもう一つの顔」を明らかにしつつ、米国の再定義を試みた。
- その上で、いま求められる人物像はどのようなものであるかを考えてみた。

(2) アメリカの起源と南北戦争

南北戦争は奴隷解放のためではなく利害の対立

●アメリカ建国の起源

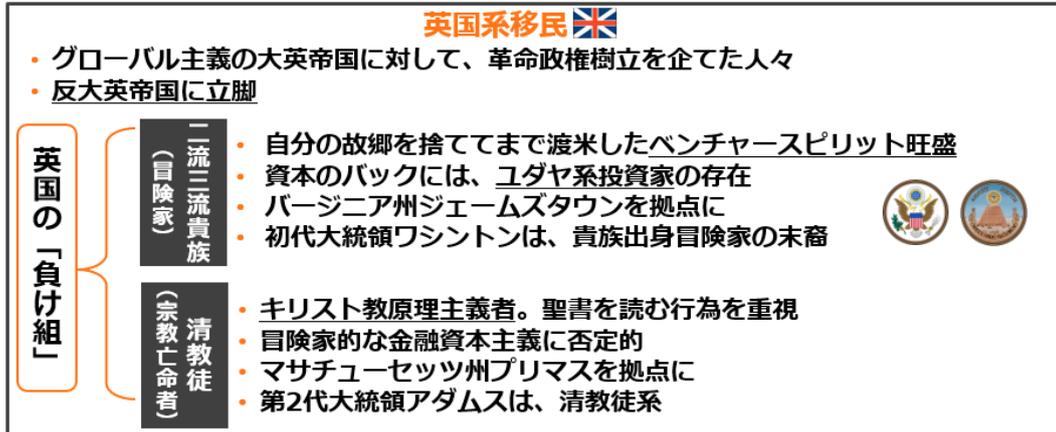
その次は、アメリカのもともとの歴史です。アメリカをつくった人たちは、英国の「負け組」です。当時のグローバル主義の大英帝国に対して、アンチを唱えました。

それには二種類います。一つは二流三流の貴族で、冒険家たちです。もう一つは宗教(キリスト教)原理主義で、清教徒の宗教亡命者です。基本的には、この二つです。

【米国の再定義】①米国の源流

「二流三流貴族」と「清教徒」の野望

「負け組」の英国系移民が建国した米国には、もともと二種類の人たちが存在し、対立があった



二流三流の貴族はジェームズタウンに拠点を置きます。初代大統領のジョージ・ワシントンは、この末裔です。キリスト教原理主義者のほうは、マサチューセッツのプリマスに拠点を置きます。2代目大統領のジョン・アダムスは、ここの末裔です。特殊なのは、人権や自由をいうもののアメリカ合衆国憲法の中には黒人とかインディアン
の権利は全く含まれていないことでした。では、誰がこの憲法をつくったのでしょうか。

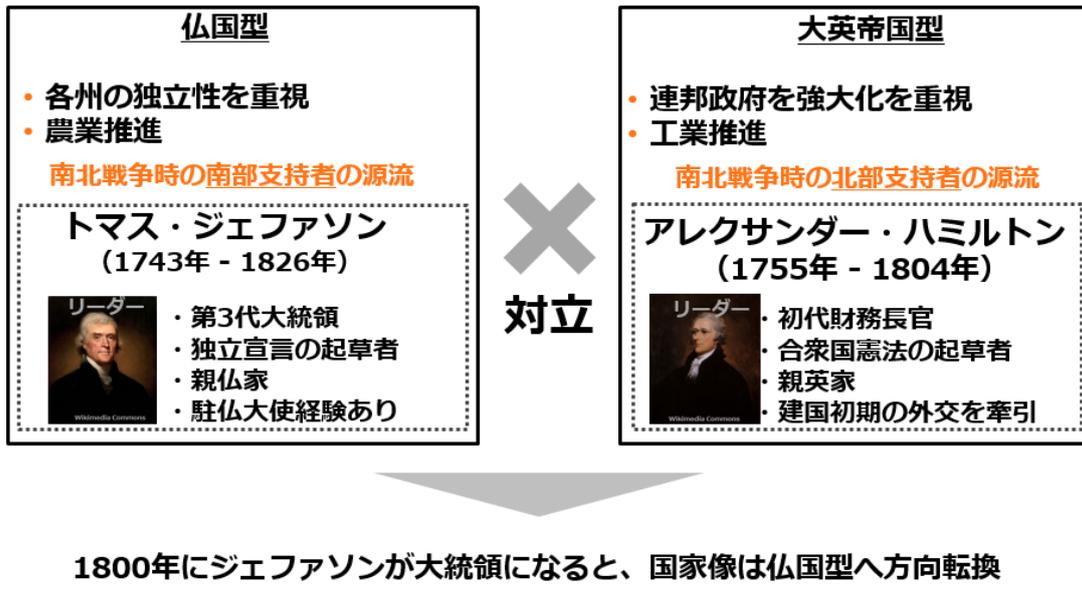
もう一つの複雑な構造は、南部は最初からフランス型で農業を推進します。トマス・ジェファソンのように駐仏大使の経験があって、フランス型の政体を支援する人たちがいました。一方で、アレクサンダー・ハミルトンのようにイギリス型の連邦政府を強化して、工業化を推進していく人たちがいました。南北戦争でいうと、北部の支持者に当たります。この二つの対立があります。

1800年に当選したジェファソンが3代目大統領になると、少なくともペリーが日本に来るまでの国家像は、フランス型のほうに変わっていきます。

【米国の再定義】①米国の源流

「仏国型」と「大英帝国型」の分断

建国前から、仏国のように緩やかな連合でいくか、大英帝国のように強固な連邦政府を樹立するかの二つの潮流が存在し、南北戦争の遠因となる



●急速な領土拡大とその背景

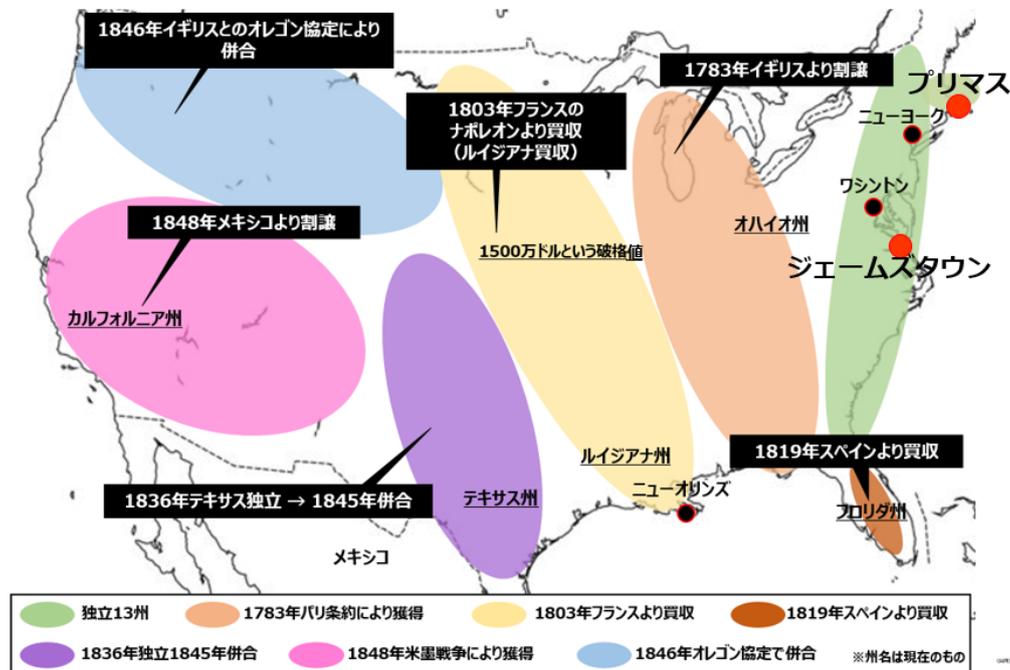
先ほどの図をもう一回見てもらいたいのですが、どうやって領土を取っていったのか、ということです。図のグリーンのところから、次にオハイオ州をとり、ルイジアナ州のニューオリンズを取ります。それからテキサスを独立させて、メキシコから併合させ、カルフォルニア州を取ります。

【イントロ③】新たな着眼点 領土拡大の変遷

1話10分で学ぶ教育動画メディア

10M TV
テンミニッツTV

confidential



その部分を大統領の名前で分解していったのが上のスライドになります。基本的にこの4人だけ覚えておいてもらえれば良いと思います。驚くべきことに、ほとんどがトマス・ジェファソンです。黒人奴隷農場主で、ルイジアナ買収を画策しました。次に、アンドリュー・ジャクソンです。こちらも黒人奴隷農場主です。それから、5代目大統領のジェームズ・モンローです。これも徹底的にインディアンをつぶしていきます。そして、ジェームズ・ポークです。策謀の限りを尽くしてテキサスを独立・合併させ、メキシコを戦争に追い込みました。

なぜ、ペリーが日本に来るまでにアメリカの13州を一気に取れたのでしょうか。ネイティブインディアンは徹底的に虐殺されます。当たり前のように、アフリカからイギリス経由でどんどん黒人奴隷をつれてきました。およそ戦争で勝ったわけでもないのに、人を奴隷として買ってきていた人たちです。これが、人権を唱えている人たちの源流で、荒々しい。

【米国の再定義】②大陸国家の成立 謀略を駆使して拡大させた領土

建国以来、列強やインディアンなどの強敵に囲まれていた米国は、
国家トップの大戦略のもと、大陸国家としての成立を果たした

第3代大統領 (1801-1809)
トマス・ジェファソン



- ・ 黒人奴隷農場主
- ・ ルイジアナ買収を画策

第7代大統領 (1829-1837)

アンドリュー・ジャクソン



- ・ 米英戦争の英雄、黒人奴隷農場主
- ・ 初の名望家出身でない大統領

第5代大統領 (1817-1825)
ジェームズ・モンロー



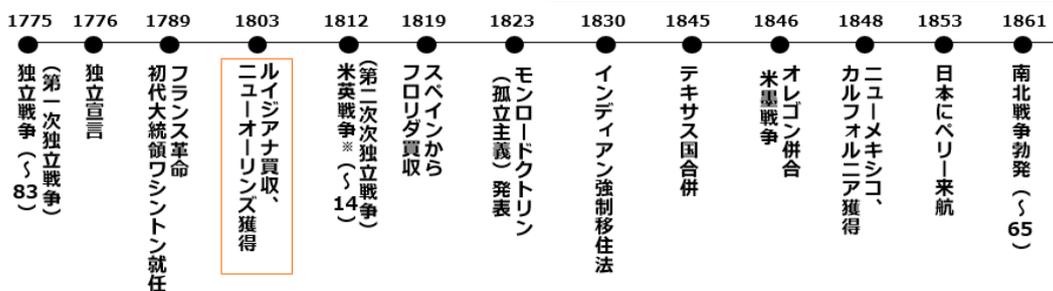
- ・ フロリダ買収
- ・ インディアン排除の徹底

第11代大統領 (1845-1849)

ジェームズ・ポーク



- ・ テキサス合併、オレゴン併合
- ・ 米墨戦争



もう一つ、この中で見ておかないといけないのは、英米は本当に仲が良かったのかということです。ワシントン条約で日英同盟を切らされるまで、1800年代を通してアメリカの最大の敵はイギリスでした。1812年～1814年は米英戦争で、独立戦争の時に英軍と一度戦っているの、これは2回目です。

米英共通の友情の歴史として、チャーチルがアメリカのウェストミンスター大学でソ連の鉄のカーテンに対抗するために演説するのですが、ほとんどが作り話です。米英共通の友情話は、実体とはかなりそぐわないのです。しかし、チャーチルのすごみは話をつくってしまうことです。「英米は昔から仲が良かった」という話に変えていきます。これはすごく大事な要諦だと思います。

●南北戦争によってアメリカは次の時代に入っていく

その次は、南北戦争とは何だったのか、ということです。これは別に奴隷解放のために南北戦争をやったわけではなくて、完全な利害の対立です。南部は、黒人奴隷を酷使して、プランテーション農業で綿花をつくり、イギリスにがんと輸出するといった自由貿易を進めていきます。北部のほうは、特に米英戦争以降、イギリスの工業製品が途絶えたので、工業化で飯を食おうということで、国内産業保護のために保護貿易を要求します。対立の基本形は、保護貿易対自由貿易です。

【米国の再定義】③南北戦争 分断どころか崩壊寸前の状態に

度重なる領土拡大によって、もともと存在していた「北部（大英帝国型）」と「南部（仏国型）」の対立が激化。ついに均衡が崩れ、南北戦争へと発展

利害の不一致



南北の均衡が崩れる

- 1860年の大統領選で、リンカーンが勝利し、南部で不満増大
- 南部州が次々と合衆国から脱退
- さらに、リンカーンとは別の大統領を担ぎアメリカ連合国を結成。



南北戦争へと発展

- 小競り合いが、米国史上最も死者を出す惨事へ発展
- 全米で壊滅的被害
- 一方、後の米国の発展の重要な契機となる

米国内の死者数

| 南北統一前 | | 南北統一後 | |
|-------------|--------------|--------|-------|
| 戦役 | 死者数 | 戦役 | 死者数 |
| 独立戦争 | 約2.5万人 | 第一次大戦 | 約11万人 |
| 米英戦争 | 約0.3万人 | 第二次大戦 | 約29万人 |
| 米墨戦争 | 約1.3万人 | 朝鮮戦争 | 約4万人 |
| 南北戦争 | 約62万人 | ベトナム戦争 | 約6万人 |

引用元:各種図表をもとに本誌にて作成

1860年にリンカーンが大統領選に勝利するのですが、南部のほうは、ジェファソン・デイビスという別の大統領を担いで、1861年から65年にかけて南北戦争に発達していく、という形です。

(アメリカ)の死者の数を見てもらうとすごく分かりやすい。南北戦争の死者は約62万人です。第二次世界大戦は約29万人です。要するに南北戦争での戦死者数のほうが多いのです。特にアトランタにいたっては、徹底的に根絶やしにされています。

『風とともに去りぬ』という映画がありますが、南北戦争前のアメリカを描いています。南部の白人たち、特に奴隷農業主たちが、いかに貴族社会をつくっていったかが非常によく分かる映画です。アトランタが燃やされるシーンを覚えておいてください。結果的に南北戦争によって、アメリカはその次の時代に入っていきます。

南北戦争前の米国の姿

南北戦争前までの米国南部の世界は『風と共に去りぬ』に描かれているように、現在の米国とは全く違う世界だった

『Gone With the Wind (風と共に去りぬ)』



『風と共に去りぬ』ポスター
(1939)

- 作者：マーガレット・ミッチェル
- 刊行：1936年
- 南北戦争下の南部（ジョージア州アトランタ）を背景に、南部の女性・スカーレットの半生を描いた作品
- 題名は、南北戦争という「風」と共に、当時絶頂にあった南部の白人たちの貴族文化社会が消え「去った」ことを意味する
- 現在は、「白人農園主を美化し、人種差別を助長する」として根強い批判と抗議を受け続けている

(3) 産業革命と帝国主義の始まり

中国を新たな標的としたアメリカ帝国主義時代の始まり

●南北戦争後の驚異的な経済発展

1800年代は、南北戦争で一回大混乱しますが、南北戦争以前のアメリカと、それ以降のアメリカは全く別の国です。1897年にマッキンリーが出るまでの間に、アメリカは別の国になります。全く違う南部と北部が一つの国になっていきます。

国力で見ると、工業生産では1894年にすでに世界一になっています。また、人口が一番分かりやすい。1860年にペリーが日本にやってきた頃のアメリカの人口は3100万人です。江戸時代の日本の人口は3000万人くらいなので、あまり変わりません。ところが、(アメリカは)工業化で一位になることによって、1900年には7600万人まで人口が増えます。ヨーロッパ、東欧、中国など、いろいろなところから移民が集まって、人口が一気に2.5倍弱ほどになっていきます。その結果として、今のマンハッタンの原型ができました。

財閥に関しては、モルガン財閥、スタンダードオイル、カーネギー、そしてフォードができます。この時に

アメリカの最初の財閥の原型ができたのです。ある種、GAF A が誕生してくるときに結構似ているかもしれない。

【米国の再定義】⑤飛躍的發展

南部でも工業化が加速し、急成長

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10M TV

テンミニッツTV

confidential

北部の勝利により、南部は黒人利権を失い、経済基盤が失われた一方で、工業化が一気に加速し、米国の資本主義は急發展を遂げた

南北戦争後

南部

黒人利権
喪失

農業国だった南部でも
工業化が進展

保護貿易により、
欧州製品を締め出し、
全米で資本主義が急發展

| | |
|-------|--|
| 国力 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 総生産の成長率は1860年代に、約2%だったが、1870年代は2.5倍に ・ 工業生産は1894年には世界一 <small>※ 書籍『アメリカ現代史』山川出版社</small> |
| 人口増加 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 1860年に約3100万人だったが、1900年には約7600万人 <small>※ アメリカ統計局</small> |
| 都市の發展 | <ul style="list-style-type: none"> ・ NYやシカゴで高層ビル建設ラッシュ |
| 西部開發 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ミシシッピ川以西や加州で金や鉛産資源の採掘 |

大陸鉄道敷設

- ・ **南部にも敷設し、南北統一の象徴となる**

巨大企業の出現

| |
|---------------------|
| 米モルガン財閥 (1864設立) |
| スタンダードオイル社 (1870設立) |
| カーネギー鉄鋼会社 (1892設立) |
| フォード社 (1903設立) |

ちなみに日本は、徳川家康が関ヶ原で勝って初めて、東日本と西日本が徳川幕府のもとで一つになっていきます。(一方、アメリカは)それをさらにスピードアップして強烈にすると、南北戦争後の40年間になります。ここでは別の国になっていて、これが二回目の大きい変容です。

これは、南北戦争前のプランテーションの様子と、この時代のことを書いた黒人奴隷のアンクルトムの物語です。南北戦争後のセントラルパシフィック鉄道によって大陸横断鉄道が3つでき、スタンダードオイルができ、マンハッタンの写真にあるようなビルが出来上がってきます。そして、フォードの工場はあっという間に1000万台ほどつくってしまいます。マンハッタンの橋にはアメリカの原型が見えます。

原敬はなぜ私費で周遊したかったのでしょうか。自分(個人)の金で2億円もお金を使って、半年間見に行ったのでしょうか。彼は、フォードの工場やマンハッタンの建設風景、そしてGEのラインを見たかったのです。その国の政治家に会いたかったわけではありません。大使館経由でいくと、お仕着せの政治家連中(との面会)の日程をどんどん組まれますが、彼にとってはそんなことはどうでもよかったのです。

15

【米国の再定義】⑤飛躍的發展
二流国家から超大国へ

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10M TV
 デジニックスTV

confidential

南北戦争後、米国は全く別の国に生まれ変わり、二流国から超大国になるための礎を築いたといえる。この辺りは日本に馴染みがない米国史

南北戦争前



ジョージア州のプランテーション農業の様子



『アンクル・トムの小屋』
 (1852)
 主役の黒人奴隷トム

南北戦争後



鉄道敷設
 セントラル・パシフィック



風刺画
 スタンダード・オイルを
 冷酷な頼として描いた



1900年頃のマンハッタン



モデルT製造ライン
 フォード社、1908年頃



マンハッタン橋
 1909年頃

原敬がみたアメリカ

今のアメリカを動かしている原理、アメリカの強さとは一体何なのかを見るために、自分で(周遊の)工程を組みたかったのが、私費で行きます。これが原敬の慧眼です。原敬はフランスで代理公使をやっていたので、フランス語は自由にしゃべれました。英語は、読むことしかできなかったですが、英字新聞は読めました。ここがすごいところだと思います。

ちなみに、岩倉使節団がアメリカを見に行った 1871 年は、まだアメリカが南北戦争の混乱の中で、政体もはっきりしておらず、アメリカの中で見るべきものがあまりありませんでした。原敬が注目して、自分で見て調べたかったアメリカは、これから世界の最有力候補になるアメリカでした。

●鉄道網の發展と西部開拓

この時代のインフラの要になったのは、1869年のユニオンセントラルのパシフィック鉄道です。これは、サンフランシスコからシカゴをつなぎます。それから、サザン＝パシフィック鉄道が 1883年にニューオリンズからロサンゼルスをつなぎます。さらに、1885年にサンタフェ鉄道がセントルイスからロサンゼルスをつなぎます。このインフラができることによって、本格的にアメリカが一つの国になっていきます。

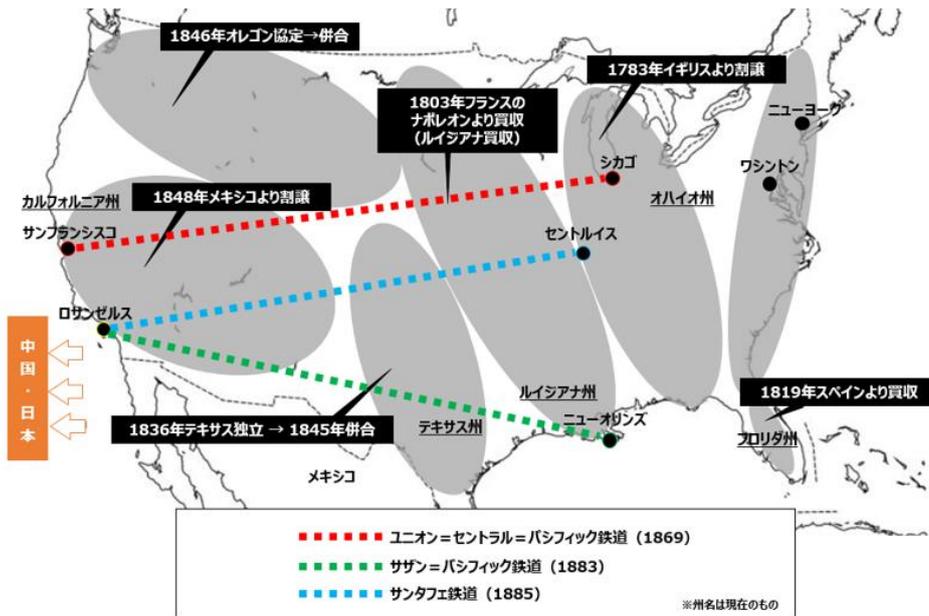
【米国の再定義】⑤飛躍的發展 領土拡大と大陸鉄道

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10M TV
テンミニッツTV

confidential

大陸鉄道は北部だけでなく、重要なインフラとして南部にも敷設され、米
国は本格的統一を果たし、全米の急激な経済成長を支えた



最初にアパラチアとロッキー山脈の絵を出しました(1)。次に、どうやってアメリカが北米大陸を全部乗っ取ったのかという絵を出しました(1),(2)。それに続いて今回、上のスライドは3枚目になるのですが、アメリカがどうやって統一したのかを示す、そのときのインフラの絵です。この3枚の絵を覚えておいていただきたいと思います。

●アメリカ帝国主義時代の始まり

これでアメリカは国内で世界最大の工業国になりますが、その次のフロンティアをカルフォルニアではなく中国に求めます。中国に求めるときに、主要な役割を果たした有名な大統領が、ウィリアム・マッキンリー、セオドア・ルーズベルト、ウッドロウ・ウィルソンです。

【米国の再定義】⑥海洋国家の成立 中国に狙いを定め、海洋覇権を手中に

経済発展後、北米に代わる新たなフロンティアとして中国を目指す過程で、太平洋やカリブ海へと領域を拡大。



第25代大統領(1897-1901)
ウィリアム・マッキンリー

- ・米西戦争勝利
- ・ハワイなどの太平洋諸国獲得



第26代大統領(1901-1909)
セオドア・ルーズベルト※

- ・マッキンリー政権下の副大統領
- ・史上最年少で大統領就任
- ・「親日」として知られるが、日本の台頭を防いだともいえる



第28代大統領(1913-1921)
ウッドロウ・ウィルソン

- ・共和党がタフト派とT・ルーズベルト派で割れたため、大統領選で勝利
- ・ドミニカおよびハイチ占領
- ・元プリンストン大学総長（現在は、同大学から除名）
- ・KKKから厚い支持があったとされる



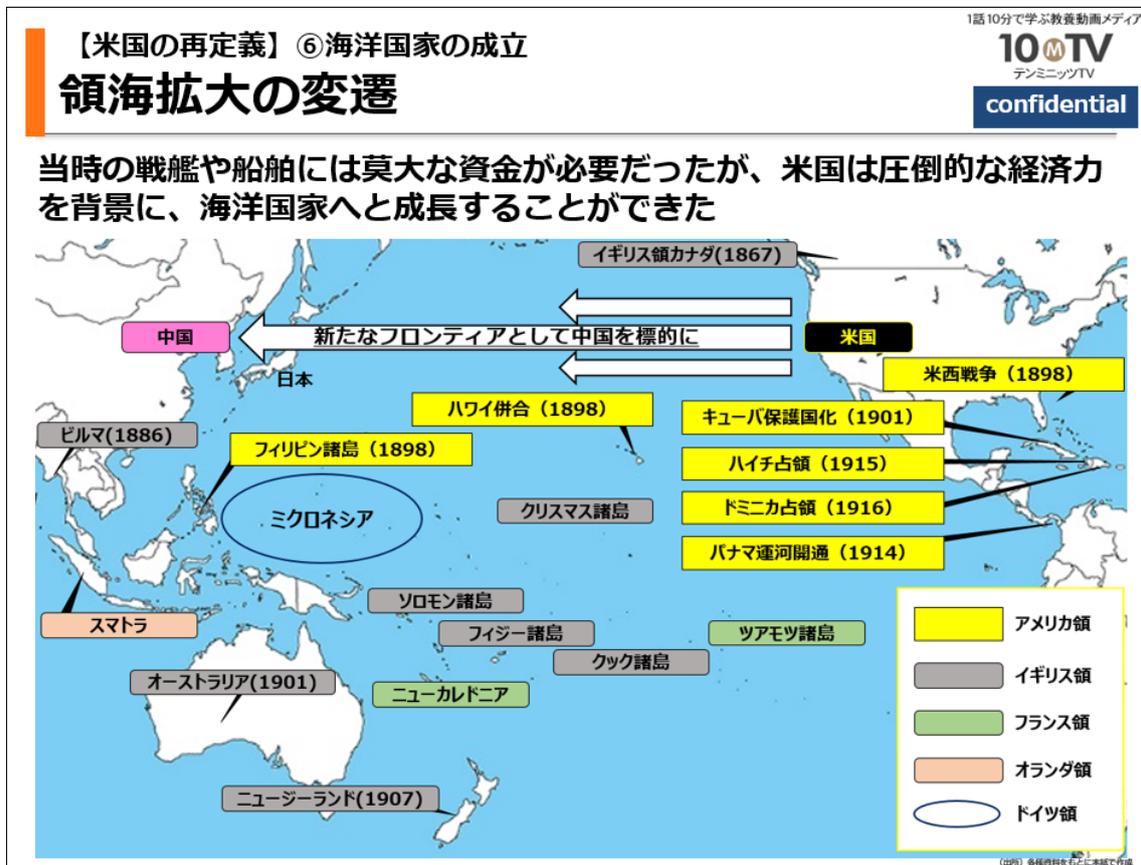
この中で見ていけないといけないこととして、まずマッキンリーはハワイの王朝をつぶして併合してしまいます。それから、スペインに戦争を仕掛けて、フィリピンとプエルトリコを取ってしまいます。さらに、パナマ運河も取り、この頃キューバも保護国にしてしまいます。その後、ウィルソンの時には、ハイチ、ドミニカとどんどん取って行ってしまいます。

ルーズベルトは日本では親日的な大統領ということになっていますが、日本の台頭を防いだ大統領ともいえます。

ウィルソンは国際連盟をつかったプリンストン大学総長です。インテリで立派な人だといいますが、彼はメンバーではなかったものの、「KKK」という白人至上主義者の右翼の圧倒的な支持がありました。ちなみに彼の名前を取った「ウィルソンスクール」というプリンストンの中にあるスクールの名前はもう無くなってしまっています。

気をつけないといけないのは、歴代大統領に親日的大統領はいなかったことです。この部分は気をつけてみておかないと見間違ってしまう。次の狙いは中国だと出て行ったときに影響を与えたのがアルフレッド・セイヤー・マハンのシーパワー理論ですが、そのシーパワー理論はルーズベルトが書いたともいわれています。ここで一つ大きな流れが変わってきます。

原敬が見た時代のアメリカは、1908年～1909年のアメリカです。岩倉使節団が見た時代のアメリカとは全く違う国になっていたのです。



絵で見ると、アメリカが帝国主義だった時代が本当によく分かります。ハワイ、フィリピンを取り、キューバ、ハイチ、ドミニカ、パナマと、どんどん拡張していきます。この流れの中には、ペリーが日本にきたり、南北戦争があったりしました。

アメリカは、工業化で圧倒的に成功して国内にフロンティアがなくなった瞬間、中国に目を向けます。ここからアメリカの帝国主義の時代が始まるという流れです。ここでもまた違うアメリカの顔が出てくるのです。

(4) アメリカの「もう一つの顔」 アメリカの「もう一つの顔」はハートランドにある

●「自国第一主義」と「常態への復帰」

【米国の再定義】⑦ 第一次世界大戦前後

ウィルソン流の限界

領土・領海を拡大した後、大戦景気を経験したが、その後、国内はボロボロの状態に。米国史上「異質」なウィルソン政権に非難が集中

1話10分で学ぶ教育動画メディア

10M TV
テンミニッツTV

confidential

ウィルソン政権末期

大英帝國的で反米国的な
グローバリズム外交（異質）

パリ講和会議主導 国際連盟創設

↓

分断どころか崩壊寸前に

深刻な不況 失業問題 厭戦気分
人種暴動 ストライキ テロ
スペイン風邪 パンデミック

↓

人々は「常識」を渴望

米国第一主義 孤立主義
国内矛盾解決を優先

米国内の様子



1919年のシカゴ人種暴動



ウォールストリート爆破事件
1929年

非難が集中

ウィルソンはアメリカ本来のDNAに合っていませんでした。第一次世界大戦の途中から参入して、グローバリズムで国際連盟をつくり、大英帝国がやったことと同じようなことをやろうと思いました。しかし、基本的にはイギリスが嫌でイギリスから逃げてきた人たちがつくった国なので、そもそも遺伝子が合いません。これはウィルソン政権の最後のほうになると、人種暴動が起きたり、ウォールストリートで爆破事件が起きたりしました。

この頃、第一次世界大戦の終わりの1918年から3年にわたって、感染症であるスペイン風邪のパンデミックが起こります。ウィルソンは大統領選に参戦しようと思ったのですが、出られないくらい人気がありませんでした。

人びとが「もうグローバルなんかもうどうでもいい」「アメリカ第一主義で、孤立主義の国内問題を解

決めてくれ」となっていたその時にハーディングが出てきます。

【米国の再定義】⑧米国の覚醒

「トランプの祖・ハーディング」の台頭

1話10分で学ぶ教養動画メディア
10M TV
デジニミックTV
confidential

「異質」なウィルソンは2期連続で大統領を務めたが、その後の1920年の大統領選でハーディングが圧勝し、米国を「正常」へと戻した

1920年大統領選構図



民主党
コックス

- ・ウィルソンは党内で支持を得られず（民主党）
- ・T・ルーズベルトは都合により辞退（共和党）



共和党
ハーディング

ハーディングの選挙戦略

- ・「『正常』に戻ろう」と繰り返し発言
- ・「米国第一主義」を猛アピール
- ・「孤立主義」を前面に押し出す
- ・ウィルソン前大統領を徹底批判
- ・最新メディアのラジオを駆使
- ・徹底的にポピュリズムを煽る
- ・玄関先キャンペーン

選挙結果
ハーディングが史上最大の得票差で勝利

ハーディング政権

| | |
|---|--|
| 内政 極端な減税、失業率半減、富裕層優遇、 移民割当法（後の排日移民法） | 外交 超高率関税、国際連盟加入拒否、 ワシントン軍縮会議、日英同盟破棄 |
|---|--|

ハーディングの選挙スローガンは、「正常に戻ろう」ということと「アメリカ第一主義」です。それから、ヨーロッパに関わりたくないという、本来のアメリカの「孤立主義」です。

コックスもハーディングも両者とも無名の候補者で、ハーディングは誰を敵にしたかという、ウィルソンを徹底的に批判します。それから、選挙のやり方を変えて、遊説ではなく徹底的にラジオを使います。トランプが SNS を使ったのと同じようなことです。この 100 年前のアンドリュー・ジャクソンもそうでしたが、ポピュリズムを徹底的に考えます。その結果、相手候補者との得票差の比率で見ると、ハーディング以上に勝った大統領はいません。

その後やったことは、極端な減税と富裕層の優遇、そしてもう移民はなるべく入れないということです。これが排日移民法として現れてきます。とにかく高率関税をかけて、国際連盟など前大統領が提案してできたものに対して加入を拒否します。一方で、ワシントン軍縮会議ではアメリカと日本が詰めながら、中国に出て行くために日英同盟を破棄させます。こうしたことがセットになって、ここでまた次のアメリカの顔が出てきます。

●狂騒の 20 年代から世界恐慌へ

1話10分で学ぶ教養動画メディア
10M TV
 テンミニッツTV
confidential

【米国の再定義】⑨「今」と重なる100年前

狂騒の20年代とその反動

ハーディング政権確立後、米国は経済・文化・芸術などが驚異的發展を遂げたが、その反動で世界恐慌を経験

狂騒の20年代※

世界恐慌と混乱

オハイオギャング政権

- ・ハーディング大統領→1921 - 1923
- ・クーリッジ大統領→1923 - 1929
- ・フーヴァー大統領→1929 - 1933

- ・フーヴァー政権時に世界恐慌を経験
- ・その後、FDRのニューディール政策(準社会主義政策)へ

これは 1920 年代の「狂騒の 20 年代」です。ここではある種、世界中の金をアメリカに持ってきてしまうので、株価が猛烈に上がってきます。

ハリウッドの勃興であるワーナーブラザーズ、MGM、コロムビアもこの時代の産物です。ジャズができ、チャールズ・チャップリンがいて、フォードは 24 年には累積で 1000 万台を超えます。それから、当時のニューメディアだったラジオは全盛期を迎えます。

このあたりのことは、映画『華麗なるギャツビー』を観てもらうと、どんな世界がこの 10 年間あったのかがよく分かります。政権では、ハーディング、クーリッジ、フーヴァーのオハイオ・ギャングがいます。結果的には、これをやりすぎて大恐慌までいきます。

今よくいわれているのが、トランプ、そしてバイデン政権になっても、リーマンショックの 10 倍くらいの財政出動をして、まだテーパリングを止めるつもりがありません。依然として、アメリカが本格的に金利を上げる局面にまだないのです。この時代は、それをほったらかしにしておいて、結局は大恐慌までいってしまいました。『怒りの葡萄』には、アメリカの失業率が 25 パーセントを超えるということで、いかに

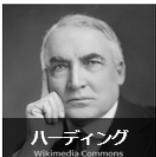
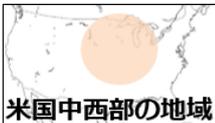
それが高くなったかに関連する話がたくさん出てきますが、ここでフランクリン・ルーズベルトが出てきます。彼が取った政策は、準社会主義政策で、またもう一回別のアメリカに入っていきます。

●ハートランドにみるアメリカの「もう一つの顔」

1話10分で学ぶ教養動画メディア
10M TV
デンミニッツTV
confidential

【米国の再定義】 ⑪繰り返す反動
日本とは接点がない米国の「もう一つの顔」

米国史を紐解くと、トランプは米国史上「異質」ではなく、むしろ「正常」だといえる。その支持層が米国の「もう一つの顔」

| | | |
|---|--|---|
| <p>自国第一主義</p>  <p>ハーディング <small>Wikimedia Commons</small></p>  <p>トランプ <small>Wikimedia Commons</small></p> | <p>支持層</p> <ul style="list-style-type: none">・ 反知性主義者・ 熱狂的かつ閉鎖的で唯我独尊的な保守層・ 東部や西部にはほとんど存在しない・ 大企業や大学、マスコミの中にはほとんど存在せず、SNSの情報を信じる・ ハートランド※やテキサスなどの南部に多く存在 <p>※ハートランド</p>  <p>米国中西部の地域</p> <p>建国以来差別されたアイルランド系、スコットランド系、ドイツ系白人が、自由の地を求めて移住し、キリスト教福音派原理主義に根ざした保守基盤を築いた地域といえる (禁酒法を最後まで支持したカンザス州も属する)</p> | <p>普段の日本人が接する機会が少ない 「米国のもう一つの顔」</p> |
|---|--|---|

アメリカの「もう一つの顔」として、押さえておかないといけないのは、ハートランドです。ここが本来アメリカのある種の中心部なのです。アングロサクソンホワイトではなく、後から来たアイルランド系、スコットランド系、ドイツ系がミズーリ州の一番豊かなところにおいて、宗教的にキリスト教の福音派がここに基盤を築いています。では、どこのアメリカ人がそんなに教会に通っているのかというと、この中西部のハートランドの人たちです。

私たちが普段接しているのは、コロンビアやハーバード、スタンフォードやシリコンバレー、そしてウォール街やワシントンだったりしますが、ここと全く違う人たちがいます。一生のうちに一回も海外に行ったことがないような人たちがいっぱいいます。こういう部分が「もう一つの顔」です。

さらに気をつけないといけないのは、テキサスとフロリダが州の法人税をゼロにしたので、イーロン・マスクのスペース X やシリコンバレーベンチャーが、税金やアパートが高くなったシリコンバレーからテキサスに向かって、どんどんと拠点を移し始めていることです。これも押さえておいたほうが良いのではないかと思います。

●現実主義的なアメリカ外交

**【米国の再定義】 ⑫一枚岩ではない米国
都合が悪くなり、他国を切り捨てた事例**

米国の「もう一つの顔」は、トランプ前大統領就任の前から、度々姿を現している。日本は米国を正しく理解しつつ、付き合うことが重要

過去の事例

| | |
|-------------------------------|---|
| 台湾国連脱退 (1971) | <ul style="list-style-type: none"> ・共産勢力対抗のため、蒋介石を援助。しかし、71年に台湾が国連脱退を余儀なくされると、72年にキッシンジャーの画策でニクソン訪中実現。 ・急激に米中の関係性が良化する一方で、79年には米華相互防衛条約破棄 |
| ベトナム戦争 (1965-1973) | <ul style="list-style-type: none"> ・軍事費の増大から経済悪化に苦しむようになり、71年にはドル＝ショックに ・ベトナム反戦運動も高揚し、南ベトナムから撤退へ |
| イラン革命 (1979) | <ul style="list-style-type: none"> ・米国の援助により近代化を推進してきたが、経済危機に直面 ・パフレヴィー2世が国外追放。イラン革命時に米国は支援を拒否。 |
| イラク戦争 (2003-2011) | <ul style="list-style-type: none"> ・1980年代にイラクと米国は蜜月を築き、資金援助や武器援助。 ・フセインは米国が育てたともいわれるが、9.11後、イラク戦争へ |

示唆

→現在のイスラム国、クルド人にも同じことが言えるのではないか

→これからの米国が、日本に対してどのように向き合うのか確実なことはいえない

→**日米同盟は所与のものではないとの認識が大事**

1話10分で学ぶ教養動画メディア
10M TV
デジニッツTV
confidential

日米同盟は本当に所与のものでしょうか。日英同盟が 1921 年のワシントン会議で切られる時まで、日英同盟が切られる、あるいはなくなるとは思っていませんでした。

よって、日米同盟は、「(アメリカは) 唯一の同盟国だ」といっていれはずと維持されるということに対して、本当にそうなのかということを絶えず考えておかないといけない局面に入ってきているのではないのでしょうか。

事例でいうと、ベトナム戦争です。軍事費増大や反戦運動などが出てきて自分のところの具合が悪くなってくると、南ベトナムは結構簡単に捨てられてしまいました。これはリチャード・ニクソンとヘンリー・

キッシンジャーの時です。

それから、ルーホッラー・ホメイニーのイランに対してイラン・イラク戦争が起きたのですが、その時、イランに対抗するために(イラクの)サッダーム・フセインを誰が育てたのかというと、アメリカが育てた以外、何ものでもありません。しかし、フセインも増長してくるとつぶされてしまいました。

最近では、イスラム国に対して一番戦ったのはキリスト教のクルド人たちですが、この人たちも、イスラム国の制圧がある程度終わって、もう必要ではなくなるとまたポイッと捨てられてしまいます。これがリアリズムなのだという認識は絶対に必要です。冒頭で話したように、もう少し知恵が必要ではないかと思えます。

それから、台湾海峡の問題などもありサプライチェーンで技術と部品は中国に出さないとか、防衛費増強で(アメリカから)イージス艦をたくさん買うとか、本当にそれだけで良いのかということを考えておかなければいけない時代に入ってきていると思います。そのあたりが私の問題意識です。

(5) 人間力と知恵

リベラルアーツを武器として、いかに知識を知恵に変えるか

●幅広い人脈を築くには人間力と知恵が必要である

最初に、原敬、高橋是清、渋沢栄一と3人の名前を出しましたが、彼らよりも現代の日本人はアメリカに人脈を持っているのかどうか、ということを実際に考えておかないといけない時代に入っています。

唯一の同盟国の割にトランプが指名した大使は、一度も日本にやって来ませんでした。代理大使だったジョセフ・ヤングが東京の大使館でずっと続いていたのですが、彼はもともとチャイナスクールで中国の専門家で、奥さんはアメリカ系中国人です。

政治と外務省系の人とつき合ってくる人たちは、基本的にはジャパンハンドラーです。ジャパンハンドラーの意味は、「日本で飯を食っている人たち」という言い方で良いと思いますが、ワシントンやコロンビアにいけば歓迎してくれて、良くしてくれます。なぜなら、自分たちの飯の種だからです。

本当にそれだけで良いのでしょうか。やはりアメリカ社会全体のさまざまな人たちと関係性を構築していけないといけません。相手が大国であることを見ていかないと厳しいと思います。

(ですから、中国は)中国共産党の北京だけ見ていると見誤ってしまいます。深センは中国共産党か

ら相当いじめられていますし、アリババのジャック・マー、そしてある種アメリカから敵視されているファーウェイ創業者の任正非も、決して中国共産党から優遇されている人ではありませんでしたが、人脈を構築していきました。

また、第一次世界大戦では、ドイツに追い込まれたイギリスがアメリカを参戦させるため、M6(英国情報局秘密情報部)が徹底的に(人脈構築を)行いました。あるいは、アメリカ大使でもあり、有名な中国の哲学者の胡適、それから当時中国の代表だった蒋介石の妻である宋美齡がやったロビイング活動にはすざまじいものがあります。

そして、今も中国は留学生を 32 万人ほど送り込んでいます。留学生の中で選抜組に対するやり方が徹底的に違っています。同じコロンビア大学、ハーバード大学に行っても、それぞれがミッションをやっています。例えば、「お前はもうひたすら毎日パーティーだけ開いて、人脈だけつくってこい」「AI だけ研究してこい」「全米 50 州全部周ってこい」というようなことを、金をつけながらやります。

私は最初に中国共産党の情報源はオーバースーチャイニーズの在日、在米の華僑だと思っていましたが、そんなことはありませんでした。今はそんなことはやっていなくて、送り込んだ留学生の中で良さそうな人にお金をつけながら、人脈地図をつくっていきます。やはり人脈のつくり方がものすごく大事なのです。

(そういう意味では)アメリカや中国という一つの括りはありません。いかに友人をいっぱいつくってくるか、本音を引き出すためにどうするかが大事です。そうすると「人間力」の話になりますが、その人間力とは何なのかというと、具体的な能力ではなく、ある種の人格です。「この人だったらグレイゾーンの話ができるな」と思わせることは、経験や知識によってしか培われず、普遍的に考える力がないとできません。それが、他者を思いやることにつながり、信頼関係ができます。ひたすら知識を詰め込んで、いろいろなことを知っているというだけでは、あまり武器になりません。それはアクセサリーとしての学問で、いくら物知りになってもあまり意味がありません。いかにリベラルアーツを武器として活用するか、知識や情報を知恵に変えるかが、一番のポイントになるのではないかと思います。

【最後に】

これからの時代に求められるリーダー像

「人間力」を活かし、世界の要人と「人脈構築」して、質の高い知と情報を獲得して「知恵」へと昇華させるべき

人脈構築

- ・主要メディアの影響力が小さくなり、SNSが台頭している中、歴史的洞察力を持ち、世界の要人と親密な人間関係を構築し、的確な知識や情報を集めるべき。特に米中は必須
- ・米国であればエスタブや、ジャパンハンドラー、親日家だけではなく、米国社会全体を見渡しつつ、さまざまな層の人たちとの関係性構築が大事
- ・中国であれば、北京とだけ繋がるのではなく、先端産業をもとに飛躍的發展を遂げたシンセンなど、多くの都市との繋がりが肝要

- ・中国は、国が多額の資金を投じて、米国に多くの留学生等を送り込み、人脈構築に力を注いでいる
- ・WWII前に英国のMI6や、中国米大使の胡適&宋美齡(蒋介石の妻)がロビイング活動を行ない、米国を対日強硬に導いた

人間力・知恵

- ・世界の要人と信頼関係を構築し、友達になり、本音を引き出すためには、「人間力」が大事
→「人間力」とは、具体的な能力ではなく、人格のこと。経験や知識によって培われた「普遍的に考える力」であり、それが他者への思いやりとなり、信頼に繋がる
- ・獲得した知識や情報を「知恵」へと昇華させるべき
- ・リベラルアーツを武器として活用すべき（アクセサリとしての学問は無意味）

●今と似ているのは持統天皇と藤原不比等の時代

それから最後に、今の状況がどの時代に似ているかをお話します。日本はこれまでだいたい中国に強力な王朝ができると、非常に動揺しました。古代だと唐が台頭してきた時代がそうで、今と非常に似ています。

かつて強烈な中国ができた時代には、最初に朝鮮半島が動揺し始めました。日本の場合は白村江の戦いで唐と新羅の連合軍にボロボロにされました。その後、内政変換において壬申の乱が起きます。結局、日本の独立はどうやって保たれたのかというと、持統天皇と藤原不比等という極めて政治的な天才が出てきたことによります。どうやったら独立国家日本をつくれるのかをこの時代の人たちは懸命に考えたのです。

考えた3点セットの1つ目は独立宣言書をつくることです。大和言葉で書いた独立宣言書が古事記で、これは対内的なものです。日本書紀は漢語で書いた独立宣言書で、これは唐に対して書かれました。2つ目は、自分たちはこんな立派なものを持っているのだということを示すために、長安を似せて造った平城京です。そして3つ目は、法治国家だと言い張るための大宝律令です。

るまで「狂騒の 20 年代」になります。

アメリカはよく変わる国です。国ごとよく変わる国だと認識することがすごく大事です。今の中国が台頭して、アメリカと中国のはざまの中で生きていくのは、相当な知恵がないと良い目には合いません。人間力、知恵という意味では、持統天皇と藤原不比等の物語が非常に参考になるのではないかと思います、その資料を加えておきました。

Summary

1話10分で学ぶ教育動画メディア
10M TV
テンミニッツTV
confidential

- ・建国時から「二流三流貴族 or 清教徒」や「仏国型 or 大英帝国型」など、さまざまな対立や分断がある
- ・その中で、重要拠点ニューオリンズを獲得するなど、南北戦争までに大陸国家へと急成長する
- ・建国時から存在した国内矛盾が表面化し、南北戦争へと発展。米国は崩壊寸前となる
- ・その後、農業国だった南部でも工業化が推進され、人口も急増し、大陸鉄道敷設や巨大企業出現によって、経済は急発展を遂げ、二流国家だった米国は大国に生まれ変わる
- ・さらに、新たなフロンティアとして中国を目指す過程で、海洋国家へと変貌を果たす
- ・第一次大戦後の社会の混乱で、米国史上異質だったウィルソンのグローバリズム外交に非難が集中し、自国第一主義を掲げたハーディングが大統領に就任する
- ・「狂騒の20年代」の中でさらに発展を遂げ、超大国の仲間入りを果たすが、その反動で世界恐慌を経験
- ・このように歴史をみても、米国は政治や経済において、極端から極端にブレて、短期間のうちに急激に姿を変える傾向がある
- ・日本としては、米国の急変化に感わされないために、ハーディングやトランプの支持層など「米国のもう一つの顔」への理解は必須
- ・その点において、これからリーダーは、歴史的洞察力を持ち、「人間力」を活かしつつ、世界の要人と親密な人間関係を構築し、知識や情報を「知恵」へと昇華させていくことが不可欠
- ・「人間力」「知恵」という意味では、持統天皇と藤原不比等の物語は非常に参考になる

最後に、参考資料をつけておきました。その中で特に見てもらいたいの、1950年代にアメリカが文化的にも世界で一番になってくるということです。ノーベル賞の数を見ても、イギリスをはるかに抜きます。アーネスト・ヘミングウェイや、平和賞を取ったジョージ・マーシャルが出てきます。映画、ロック、音楽にしても、1950年代に欧州が荒廃している中で、世界中から優秀な移民が退去して、ユダヤ人等含めアメリカに入ってきます。50年代以降は文化的にも圧倒的に出てきます。

繰り返しになりますが、アメリカは絶えず発明とイノベーションがあり、一国自体が変わる国です。当然、極端から極端にぶれる性質も併せ持っています。そのことを十分に押さえた上で、中国とアメリカについて考え、それから日本はどうするべきかを考えなければいけません。こうした難しい時代には相当な賢さがいるのではないかと感じます。

【米国の再定義】1950年代の黄金期 《参考》米国覇権の始まり

第二次大戦や朝鮮戦争を経て、米国はさらに発展し、1950年代に欧州から文化的に独立し、覇権国家へと邁進

覇権国へ

国力

- ・米国は既に1930年代に最大の債権国
- ・1946年から1959年までベビーブーム。この時期に約7820万人生まれたとされる
- ・一人当たりの国内総生産（GDP）は50年代を置いてトップに

（大衆生産・大衆消費）米国民

- ・投資ではなく消費がこの時代の繁栄を推進
- ・自動車、TV、洗濯機、掃除機、アイロン、トースターなどが飛躍的に普及
- ・GMは年10億ドル以上を稼ぐ米巨大の企業へ
- ・自動車普及で移動距離が増し、郊外人口が全体の3分の1に上昇



文化的独立

1950年代の主な米国人

- ・ジョージ・マーシャル（平和賞、1953）
- ・アーネスト・ヘミングウェイ（文学賞、1954）、など

1950年代のノーベル賞受賞者国別比較

| 米 | 英 | 独 | ソ連 | 仏 | 日本 |
|-----|-----|----|----|----|----|
| 32人 | 12人 | 5人 | 5人 | 4人 | 0人 |

芸術家

- ・ジャクソン・ポロック（1912-1956）、
- ・エドワード・ホッパー（1882-1967）、
- ・ノーマン・ロックウェル（1894-1978）、
- ・アンドリュー・ワイエス（1917-2009）、など

映画、ロック音楽、若者文化など、さまざまな文化が定着



この間、米国に対抗できる大国は存在しなかった

これで講義のほうを終わらせて頂きます。ありがとうございました。

以上

<参考文献・参考サイト>

- 久保文明『アメリカ政治史』有斐閣、2018年
 久保文明『アメリカ外交の諸潮流—リベラルから保守まで』日本国際問題研究所、2007年
 齋藤健『増補 転落の歴史に何を見るか』ちくま文庫、2011年
 伊藤之雄『原敬 外交と政治の理想 上』講談社、2014年
 伊藤之雄『原敬 外交と政治の理想 下』講談社、2014年
 福田和也『大宰相・原敬』PHP研究所、2013年
 松田十刻『原敬の180日間世界一周』もりおか文庫、2018年
 松本健一『原敬の大正』毎日新聞社、2013年
 N-K取材班・編『その時歴史が動いた 23』KTC中央出版、2004年
 原奎一郎『原敬日記』全6巻 福村出版、1965年～1967年
 額田厚『田中義一—総力戦国家の先導者』芙蓉書房出版、2009年
 片山杜秀『未完のファンズム—「持たざる国」日本の運命』新潮社、2012年
 洪沢栄一『洪沢栄一交遊録 アメリカの名経営者と政治家：ハインツ、ロックフェラーから ルーズヴェルトまで』（幕末明治研究会：編集）
 宮脇淳子『皇帝たちの中国史』徳間書店、2019年
 齋藤健『「ジェネラリストの巨星・原敬」』（テンミニッツTV）、2014年
 谷口和弘『海外M&A成功の条件』（テンミニッツTV）2019年
 東秀敏『米論再考』（テンミニッツTV）2020年
 東秀敏『1920年度米大統領選挙』（テンミニッツTV）2020年
 ※以上、敬称略
 ※なお資料内の画像（出典）はWikimedia Commons（パブリックドメイン）です

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10M TV
テンミニッツTV